

## フォーラム

### グアナファトとその周辺の自動車産業についての考察

鈴木 康久（在レオン日本総領事館・総領事）

今世界中の自動車産業が注目しているグアナファト州はメキシコ中央高原にある人口500万人を超える州で、もともとは銀の生産で1520年代にスペイン人によって最初に植民地化された地域の一つである。鉱物資源が豊かだった植民地時代の名残りから、州都グアナファト市やサンミゲル・デアジェンデ市にはいくつもの立派なカトリック教会が並んでおり、その歴史的な市街地と近辺の銀山はユネスコ世界遺産に登録されている。

同州にGMの工場が操業開始したのが1995年で、西隣のアグアスカリエンテス州で日産が自動車生産をスタートしたのが1992年である。双方とも、もともと輸入代替産業としてメキシコ市近郊に工場を持っていたが、政府の自由化政策にともない、国内需要のみならず北米市場も視野においた新しい工場をこの中央高原に建設したのである。双方の工場には、米国、カナダともつながる鉄道路線が隣接し、引き込み線を利用して工場から車両を北米に輸出できるインフラが整っている。さらに、グアナファト州を横に走る45号線と縦に走る57号線（パンアメリカンハイウェイ）沿いに多くの工業団地が設置され、車両用部品の工場が建ち並んで物流の便が整っている。日本から部品が入ってくるマンサニージョ港や米国東海岸および欧州向けの輸出港であるベラクルス港との物流ルートも整っている。

この中央高原は内陸地帯ではあるが、広大なサボテン平原を切り開いて次々に大きな工業団地が作られていき、平行して道路が整備されていった。たとえばプエルト・インテリオール工業団地には100以上の工場が入居し、日系企業の工場だけでも50社あまりが入居している。歴史的にメキシコは南部諸州から出てくる豊かな石油資源を中心に資源国家として発展してきたが、ここにきて中央高原地帯に一大工業地帯が形成されつつあるのである。

もともとメキシコの北部の国境地帯では、1965年にできたマキラドーラという免税制度を利用して自動車部品メーカー、電気製品メーカーが進出していたが、NAFTA発効以降これらの企業進出がさらに拡大した。また航空機関係の企業の進出も進んだ。2008年にグアナファトの東隣のケレタロ州にカナダの航空機メーカー、ボンバルディアの大型工場がスタートし、関連企業も進出するに及んで、ケレタロ州の知事は、航空機産業がケレタロの目指す主要産業であり、さらに自動車産業の発展も期待すると述べている。

以上を背景に、2014年にグアナファト州にはホンダとマツダが工場を開設した。現在トヨタも2019年開設を目指して同州に工場の建設を進めている。外国勢では、本年5月に北部のヌエボレオン州で韓国系KIAの工場が稼働を開始し、BMBとGMが北東隣のサンルイスポトシ州に工場を建設中で、フォードも同州に工場建設を発表している（1月3日、フォードは工場建設をキャンセルする旨発表した）。アグアスカリエンテスでは日産とダイムラーベンツの合弁工場COMPASを建設中で2017年に始動する予定である。

以上グアナファトとその周辺の自動車産業の現状についての紹介である。メキシコの自動車産業のフィーバーはしばらく続く見通しで、国内生産台数は現在の350万台から2020年には500万台に達すると見込まれている。しかしすでに輸出のためのインフラもめいっぱいの状態で、鉄道や港湾といったインフラ整備が大いに期待されている。また、生活面では進出越した本邦企業関係者をささえるサービス業の進出も期待されるところである。何れにせよグアナファト州に進出した自動車産業を核に日墨経済関係が飛躍的に緊密化していることは確かである。